

知的障害を併せ有する視覚障害児の「手でみる力」を育むために

—教材を活用した学習における手指運動の変容に着目して—

静岡県立静岡視覚特別支援学校 桑田 園子（指導教員：佐島 毅）

盲・知的障害児を対象に手指探索や手指操作を高めることを目的とした学習を行い、5つの課題における課題遂行中の手指運動の変化を分析した。学習を重ねる中で全ての課題において手指の動きや使い方は変化し、それらの変化は探索意欲や手指操作の高まりと考えることができる。また、盲・知的障害児の手指探索や手指操作を高めるためには、感覚フィードバックの明確な教材を通して、繰り返し体験的に学習することが効果的で、子どもが試行錯誤を繰り返し、自ら発見できるような学びが重要であるという考察に至った。

キー・ワード：盲・知的障害 感覚フィードバックの明確な教材 手指運動 試行錯誤

I 目的

特別支援学校では、障害の「多様化」と「重度・重複化」が同時に進行している。所属校においても義務教育段階の重複障害児童生徒の在籍率は、6割を占め、その多くが知的障害を併せ有する。彼らに対しては、障害が重複していることによる困難の独自性を理解してアプローチする必要があるとされている。そこで本研究では、知的障害を併せ有する視覚障害児を対象に手指探索や手指操作を高めることを目的とした学習を行う。感覚フィードバックの明確な教材を使用して、手指運動の変容や教材を活用した学習の効果を明らかにする。

II 方法

対象は、盲・知的障害児。ものに触れたり、人に触れられたりすることを嫌い、集団での活動に参加できないことがあった。大声を出したり、つばを吐いたりするなどの行動が見られた。

平成29年6月から12月までの週2回、30分の個別学習を実施した。課題遂行中の対象児の様子をビデオで記録し、記録した動画をもとに分析した。

学習で使用した教材は、対象児の手指運動の発達段階に合わせて、押す、穴に入れる、穴から出す、棒から抜く、棒に差す、大きさや形を弁別する等の動きを引き出す教材を用いた。そのうち、手指運動の変容を捉えやすい玉落とし課題、円柱さし課題、円盤はめ課題、おはじき入れ課題、型はめ課題を選定し、課題遂行中の手指運動の変容を分析した。

III 結果

玉落とし課題では、玉をたたく点的な動作や内側から外側へのランダムな直線的動作は減少し、手首または肘を支点とした面的な動作が増加した。また最初に手を置いた部分を支点とした探索から体に近いところにある部分を支点とした探索に変化した。

円柱さし課題では円柱の持ち方に3段階の変化が、円柱の入れ方には2段階の変化が見られた。

円盤はめ課題では、円盤のはめ方に4段階の変化が、円盤をはめた直後の左手の動きには3段階の変化が見られた。

おはじき入れ課題では、手首を回内させておはじきの向きを穴に合わせる動きと手首を回外させておはじきの向きを穴に合わせる動きが見られた。

型はめ課題では、凹面を触る動きと図形をはめる動きにそれぞれ4段階の変化が見られた。

IV 考察

玉落とし課題における手指運動の変化からは、探索範囲の広がりや両手を使用した探索の増加が見られ、探索意欲が高まったと考えることができる。

円柱さし課題における手指運動の変化からは、円柱を鉛直方向に向けるために、両手を協応させて円柱の持ち方や入れ方を工夫していると考えられる。

円盤はめ課題の手指運動の変化からは、両手が分離して協応する段階へと変化したと考えられる。

おはじき入れ課題の手指運動の変化からは、手首を回外させる動きが難しいことがわかり、教材の大きさや教材の提示位置の観点から指導を見直し、より細かいステップで回内から回外へと手指の機能を育てる必要性を感じた。

型はめ課題における手指運動の変化からは、試行錯誤して図形をはめる段階からイメージをしてはめる段階に変化していることが推察される。

V まとめ

盲児は、視覚的な情報が得られないため、状況理解が困難であり、知的障害を併せ有する場合、さらに困難を呈する。盲児にわかりやすい感覚フィードバックの明確な教材を通して、繰り返し体験的に学習することで、自分の行為と結果の因果関係を考えながら、能動的に教材に働きかけることができるようになる。盲・知的障害児が試行錯誤を繰り返し、自ら発見できるような学びを提供することが重要だと考える。

知的障害教育におけるSSTを取り入れた 外国語の指導内容表の検討

—北海道における特別支援学校高等部への悉皆調査から—

北海道星置養護学校ほしみ高等学園 吉田 史人（指導教員：柘植 雅義）

平成29年3月に公示された学習指導要領において、通常学校との学びの連続性を重視した対応が求められるようになり、特別支援教育の枠組みの中でも外国語についての在り方を問われることとなった。そこで第一に、特別支援学校高等部への外国語の実態に関する質問紙調査を行った。第二に、知的障害教育において外国語にソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）を取り入れた先行研究の成果を踏まえ、SSTを取り入れた外国語の指導内容表（試案）（以下、本試案）を作成した。第三に、作成した本試案の有効性や実用的な指導内容について追加調査し、本研究の成果や課題が明らかになった。また、追加調査の結果をもとに知的障害教育におけるSSTを取り入れた外国語の指導内容表（以下、指導内容表）を完成させた。

キー・ワード：知的障害特別支援学校高等部 SST 外国語 指導内容表

I 目的

小学校の特別支援学級における外国語活動において、SSTを導入し児童のコミュニケーション能力や児童同士のかかわりの向上に効果があるとの報告があった。小学校のみならず特別支援学校高等部の外国語においても同様の効果があるのではないかと考えた。そこで本研究では、第一に、特別支援学校高等部の外国語の実態を質問紙調査から明らかにする。第二に、調査から見えてくる課題等を解決するために本試案を作成する。第三に、本試案の有効性と実用的な指導内容について検討すること、指導内容表を完成させることを目的とした。

II 方法

1 第一研究 外国語の実態に関する質問紙調査

(1)対象：特別支援学校高等部 全49校
学校長・外国語教諭（各1名）

(2)方法：郵送調査法（悉皆調査）

2 第二研究 本試案の作成

・「特別支援教育」「指導内容表」「外国語」などのキー・ワードをCiNiiで検索した。
・特別支援学校高等部8校から資料提供
・生徒に育みたい資質能力・課題点の整理
→上記3点を踏まえて本試案に反映させた。

3 第三研究 本試案の有効性と実用的な指導内容の検討に関する質問紙調査と面接調査

(1)対象：第一研究の回答者

(2)方法：質問紙調査（21校）→郵送調査法
面接調査（3校）→半構造化面接

III 結果

1 第一研究 回収率：67.3%

(1)指導内容表を作成した学校：48.5%
(2)指導内容表を活用した感想「良い」：62.5%
(3)指導内容表を作成していない学校で年間指導計画作成時に困った経験がある：88.2%
(4)外国語において実践している指導内容
「自分の名前を伝える会話表現を覚える」：95.2%

「あいさつの表現を覚える」：95.2%

(5)外国語が必要である：72.4%

(6)外国語の授業準備で困った経験がある：85.7%

(7)生徒に育みたい資質・能力：「相手に配慮しながらコミュニケーションを図る」：62.5%

2 第二研究

文献研究及び第一研究の調査結果を踏まえて本試案に掲載する題材を決定した。表1に記載する。

表1 作成した内容表の題材一覧と活用した第一研究の実態調査の項目

題材一覧	活用した第一研究の実態調査の項目
題材1：自己紹介の表現 (あいさつじゃんけん)	① あいさつの表現を覚える活動 ② 自分の名前を伝えるための会話を覚える活動
題材2：好きなもの・嫌いなもの	③ 自分の好みを伝えるための表現を覚える活動
題材3：買物しよう	④ 相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を養うこと
題材4：〇〇貸して	⑤ AがBを読む活動・書く活動
題材5：AがBを読む・書く	④ 相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を養うこと
題材6：デジタル絵本 Quizzes	

3 第三研究

質問紙調査（21校） 回収率：66.7%

(1)SSTを取り入れた外国語の理解度と実践経験
「理解度」：71.4%, 「実践経験」：42.9%

(2)最も実用的な題材：題材1 78.6%

(3)本試案は効果がある：100.0%

面接調査（3校）

(1)SSTの理解度：理解している 66.7%

(2)実用的な指導内容がある：66.7%

(3)本試案は効果がある：100.0%

→調査結果を踏まえて指導内容表を完成させた。

IV 考察

1 成果 外国語の実態が明らかになった。指導内容表（試案）の有効性が示され、外国語の授業準備等の困難さを解消することが期待される。

2 課題 生徒の評価方法を検討し、授業で実践することで、指導内容表の教育的効果をエビデンスとして蓄積していくことが望まれる。